

2025 年度 前期 中間試験 (問題兼 解答用紙)

開講学部	評点小計
理工学部	

評点

問題枚数	両面印刷	別紙解答用紙	試験時間	試験科目名			出題者
2/4p	有	なし	80分	線形代数 4			大西良博
持込許可物件	所属学部	所属学科	学年	クラス	学籍番号 (9桁)	氏名	
なし	理工学部	学科	年				

注意 1. 最終的な答に至る途中の説明をできるだけ詳しく書くこと。最終結果だけでは得点できない。
 注意 2. 学生証, 記名用のペン, 鉛筆またはシャープペンシル, 消しゴム以外は机の上に置かないこと。
 注意 3. 試験場の静粛を保つために, 退出は開始 60 分後の時点の一回限りとする。

1 (10 点) 実対称行列の固有値は全て実数であることを示せ。

(Hint: 与へられた実対称行列 A を $\text{Mat}(n, \mathbb{C})$ の元とみて, $\lambda \in \mathbb{C}$ を A の任意の固有値とせよ。即ち $Ax = \lambda x$ なる $x \neq 0$ が存在する。この複素共役をとれば $\overline{Ax} = \overline{\lambda x}$ である。ここで ${}^t \overline{x} Ax$ を 2 通りに計算することで, $\overline{\lambda} {}^t \overline{x} x = \lambda {}^t \overline{x} x$ を示し, これから $\overline{\lambda} = \lambda$ を示せ。)

証明. A を任意の n 次実対称行列とせよ。 $\lambda \in \mathbb{C}$ を A の固有値とせよ。即ち $A \in \text{Mat}(n, \mathbb{R}), {}^t A = A$ であり,

$$Ax = \lambda x$$

となる複素数成分の vector $x \neq 0$ が存在する。この式の両辺の複素共役をとれば

$$A\overline{x} = \overline{\lambda x} \quad (\because A \text{ は実行列})$$

を得る。このとき

$$\begin{aligned} \overline{\lambda} {}^t \overline{x} x &= {}^t (\overline{\lambda x}) x = {}^t (A\overline{x}) x \\ &= {}^t \overline{x} {}^t A x = {}^t \overline{x} Ax = {}^t \overline{x} (\lambda x) = \lambda {}^t \overline{x} x. \end{aligned}$$

即ち,

$$(\star) \quad \overline{\lambda} {}^t \overline{x} x = \lambda {}^t \overline{x} x.$$

ここで $x = \begin{bmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{bmatrix}$ とすると $x \neq 0$ である。よつて

$${}^t \overline{x} x = \overline{x_1} x_1 + \cdots + \overline{x_n} x_n = |x_1|^2 + \cdots + |x_n|^2 \neq 0$$

であるから, (\star) から $\overline{\lambda} = \lambda$, 即ち $\lambda \in \mathbb{R}$ を得る。

2 (10 点) 実対称行列 $A = \begin{bmatrix} 1 & 3\sqrt{3} \\ 3\sqrt{3} & -5 \end{bmatrix}$ に対し, $B = P^{-1}AP$ が対角行列となる直交行列 P を求め, B も記せ。

略解.

$$\varphi_A(t) = t^2 - 4t - 32 = (t - 8)(t + 4).$$

固有空間は

$$\begin{aligned} W(-8, A) &= \mathbb{R} \begin{bmatrix} 1 \\ -\sqrt{3} \end{bmatrix}, \\ W(4, A) &= \mathbb{R} \begin{bmatrix} \sqrt{3} \\ 1 \end{bmatrix}. \end{aligned}$$

そこで

$$P = \frac{1}{2} \begin{bmatrix} 1 & \sqrt{3} \\ -\sqrt{3} & 1 \end{bmatrix} \in O(2, \mathbb{R})$$

とおくと,

$$B = P^{-1}AP = {}^t PAP = \begin{bmatrix} -8 & \\ & 4 \end{bmatrix}$$

3 (15点) 方程式 $x^2 - 5y^2 + 6\sqrt{3}xy - 4\sqrt{3}x + 28y - 15 = 0$ の標準形を求め、これが表す xy 平面上の2次曲線 C の概形を図示せよ。
 (x 軸, y 軸との交点の座標, 軸, 漸近線なども可能な限り明示せよ。2の結果を利用してよい。)

略解. 計算を略すが, 中心は $(-\sqrt{3}, 1)$ である. 方程式の左辺を $F(x, y)$ とおくと,

$$0 = F(x' - \sqrt{3}, y' + 1) = x'^2 + 6\sqrt{3}x'y' - 5y'^2 + 5$$

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 3\sqrt{3} \\ 3\sqrt{3} & -5 \end{bmatrix}$$

とおくと, これは

$$[x' \ y']A \begin{bmatrix} x' \\ y' \end{bmatrix} + 5 = 0$$

と書ける. 2の結果の記号を使用して,

$$\begin{bmatrix} x'' \\ y'' \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} x' \\ y' \end{bmatrix} P = \begin{bmatrix} x + \sqrt{3} \\ y - 1 \end{bmatrix} P$$

とおく. このとき

$$F(x, y) = [x' \ y']A \begin{bmatrix} x' \\ y' \end{bmatrix} + 5 = [x'' \ y'']P^{-1}AP \begin{bmatrix} x'' \\ y'' \end{bmatrix} + 5 = [x'' \ y''] \begin{bmatrix} -8 & 0 \\ 0 & 4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x'' \\ y'' \end{bmatrix} + 5 = -8x''^2 + 4y''^2 + 5$$

なので, $(x, y) \in C \iff -8x''^2 + 4y''^2 + 10 = 0$.

$$8x''^2 - 4y''^2 = 5$$

$$\therefore \frac{x''^2}{\frac{5}{8}} - \frac{y''^2}{\frac{5}{4}} = 1.$$

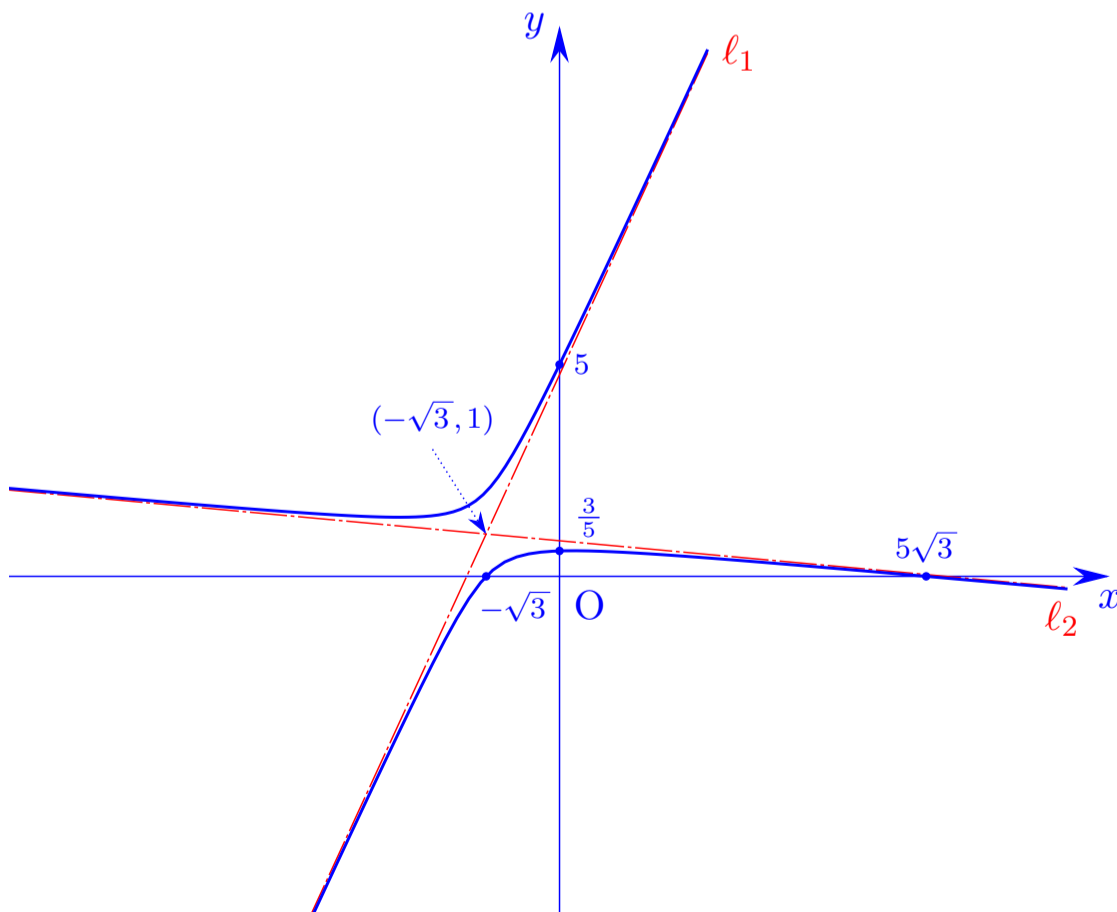
これが求める標準形であり, $x''y''$ 平面における, これの漸近線は

$$y'' = \pm\sqrt{2}x''.$$

ゆゑに, C の漸近線は

$$l_1 : y - 1 = \left(\frac{3\sqrt{3} + 4\sqrt{2}}{5} \right) (x + \sqrt{3}) \quad (= 2.1706... \times (x + \sqrt{3})),$$

$$l_2 : y - 1 = \left(\frac{3\sqrt{3} - 4\sqrt{2}}{5} \right) (x + \sqrt{3}) \quad (= -0.0921... \times (x + \sqrt{3})).$$



4 (15点) 実対称行列 $A = \begin{bmatrix} 1 & -6 & -4 \\ -6 & 2 & 2 \\ -4 & 2 & -3 \end{bmatrix}$ に対し,

$B = P^{-1}AP$ が対角行列となる直交行列 P を求め, B も記せ.

略解.

$$\varphi_A(t) = t^3 - 63t - 162 = (t-9)(t+3)(t+6).$$

$$W(9, A) = \mathbb{R} \begin{bmatrix} -2 \\ 2 \\ 1 \end{bmatrix},$$

$$W(-3, A) = \mathbb{R} \begin{bmatrix} -1 \\ -2 \\ 2 \end{bmatrix},$$

$$W(-6, A) = \mathbb{R} \begin{bmatrix} 2 \\ 1 \\ 2 \end{bmatrix}.$$

$$P = \frac{1}{3} \begin{bmatrix} -2 & -1 & 2 \\ 2 & -2 & 1 \\ 1 & 2 & 2 \end{bmatrix}$$

$$B = {}^tPAP = \begin{bmatrix} 9 & & \\ & -3 & \\ & & -6 \end{bmatrix}$$

学籍番号

5 (10点) 方程式

$$x^2 + 2y^2 - 3z^2 - 12xy - 8xz + 4yz = 9$$

で定義される 2 次曲面の標準形を求めよ. また得られた標準形の表す曲面の概略 (座標軸の名称は入れること) を図示し, その曲面の名称も記せ. (4 の結果を利用してよい.)

略解. 4 の記号を流用する.

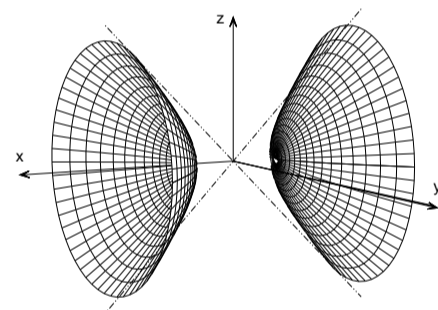
$$\begin{bmatrix} x' \\ y' \\ z' \end{bmatrix} = P \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix}$$

とおくと

$$\begin{aligned} (\text{与式の左辺}) &= [x \ y \ z] A \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} \\ &= [x \ y \ z] {}^tPBP \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} \\ &= [x' \ y' \ z'] B \begin{bmatrix} x' \\ y' \\ z' \end{bmatrix} \\ &= 9x'^2 - 3y'^2 - 6z'^2 \end{aligned}$$

となる. よつて求める標準形は

$$x'^2 - \frac{y'^2}{3} - \frac{z'^2}{\frac{3}{2}} = 1.$$



二葉双曲面

6 (10点) A を n 次の実対称行列とせよ. \mathbb{R}^n には標準内積を入れておく. $\mathbf{u}, \mathbf{v} \in \mathbb{R}^n$ をそれぞれ A の固有値 λ, μ に対する固有 vectors とせよ. このとき $\lambda \neq \mu$ ならば $\mathbf{u} \perp \mathbf{v}$ であることを示せ.

証明. 仮定より

$$A\mathbf{u} = \lambda\mathbf{u}, \quad A\mathbf{v} = \mu\mathbf{v}.$$

このとき

$$\begin{aligned} \lambda \cdot (\mathbf{u}, \mathbf{v}) &= \lambda \cdot {}^t\mathbf{u}\mathbf{v} = {}^t(\lambda\mathbf{u})\mathbf{v} = {}^t(A\mathbf{u})\mathbf{v} \\ &= {}^t\mathbf{u}{}^tA\mathbf{v} = {}^t\mathbf{u}(A\mathbf{v}) \quad (\because A \text{ は対称行列}) \\ &= {}^t\mathbf{x}(\mu\mathbf{v}) = \mu \cdot {}^t\mathbf{u}\mathbf{v} = \mu \cdot (\mathbf{u}, \mathbf{v}). \end{aligned}$$

ゆえに,

$$(\lambda - \mu) \cdot (\mathbf{u}, \mathbf{v}) = 0.$$

ここで, 仮定より $\lambda - \mu \neq 0$ なので,

$$(\mathbf{u}, \mathbf{v}) = 0.$$

即ち,

$$\mathbf{u} \perp \mathbf{v}$$

である.

7 (10点) t を不定元とする. 次の集合 M は $\mathbb{R}[t]$ の ideal であるか否か, 理由を付けて答へよ.

$$(1) M = \{f(t) \in \mathbb{R}[t] \mid f(2) = 0, f(1) = f'(1) = 0\}.$$

略解. Ideal である. 実際 **I1** は簡単に示されるし, **I2** についても以下の様にして示される.

任意の $g(t) \in \mathbb{R}[t]$ と $f(t) \in M$ について,

$$g(1)f(1) = g(1) \cdot 0 = 0$$

であるし,

$$(fg)' = f'g + fg'$$

なので

$$(fg)'(1) = f'(1)g(1) + f(1)g'(1) = 0 \cdot g(1) + 0 \cdot g'(1) = 0.$$

残りの条件 $g(2)f(2) = 0$ を満たすことも簡単に確認できる.

$$(2) M = \{f(t) \in \mathbb{R}[t] \mid f(0) = f'(1) = 0\}.$$

略解. $f(t) = t(t-2) = t^2 - 2t$ について $f'(t) = 2t - 2$, $f(0) = 0$, $f'(1) = 0$ なので $f \in \mathbb{R}[t]$.

一方, $g(t) = tf(t) = t^3 - 2t^2$ について, $g'(t) = 3t^2 - 4t$, $g'(1) = 0$ なので $g \notin \mathbb{R}[t]$. よって M は ideal ではない.

8 (10点) $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3, \mathbf{a}_4, \mathbf{a}_5 \in \mathbb{R}^4$ について,

$$A = [\mathbf{a}_1 \ \mathbf{a}_2 \ \mathbf{a}_3 \ \mathbf{a}_4 \ \mathbf{a}_5],$$

$$W_1 = \mathbb{R}\mathbf{a}_1 + \mathbb{R}\mathbf{a}_2 + \mathbb{R}\mathbf{a}_3, \quad W_2 = \mathbb{R}\mathbf{a}_4 + \mathbb{R}\mathbf{a}_5$$

とおく. 以下の問に答へよ.

(1) A の簡約化が

$$B = \begin{bmatrix} 1 & 0 & -3 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 2 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$$

となつた. このとき $\mathbb{R}^4 = W_1 + W_2$ は正しいか否か. また, $\mathbb{R}^4 = W_1 \oplus W_2$ は正しいか否か. 理由を付けて答へよ.

略解. どちらも正しい.

(2) A の簡約化が

$$B = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & 5 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$$

となつた. このとき $\mathbb{R}^4 = W_1 \oplus W_2$ は正しいか否か. 理由を付けて答へよ.

簡約化の結果から, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_4, \mathbf{a}_5$ は 1 次独立で, 全空間 \mathbb{R}^4 を生成する. よつて $\mathbb{R}^4 = W_1 + W_2$ である. しかし,

$$W_1 \cap W_2 \ni \mathbf{a}_4 \neq \mathbf{0}$$

なので, $\mathbb{R}^4 = W_1 \oplus W_2$ は正しくない.

9 (10点) 次の行列 A の最小多項式 $\mu_A(t)$ を記せ.

$$A = \begin{bmatrix} 5 & 1 & & & & \\ & 5 & 1 & & & \\ & & 5 & & & \\ & & & 5 & & \\ & & & & -2 & 1 \\ & & & & & -2 \end{bmatrix}.$$

結果のみでよい.

略解. $\mu_A(t) = (t-5)^3(t+2)^2$.

記号

\mathbb{N} … 自然数全体, \mathbb{Z} … 整数全体のなす環, \mathbb{Q} … 有理数全体のなす体,
 \mathbb{R} … 実数全体のなす体, \mathbb{C} … 複素数全体のなす体, I … 単位行列.

既習事項のまとめ

- (1) $A = A$ を満たす行列を 対称行列 と呼び、 $A = -A$ を満たす行列を 交代行列 と呼ぶ.
 - (2) 行列の主成分とは、各行における 0 でない最も左にある成分のことである. 従って主成分が存在しない行もあり得る.
 - (3) 簡約行列とは“右下りの優しい階段状”の行列であつて、主成分がすべて 1 で、主成分のある行は主成分以外はすべて 0 であるものと.
 - (4) どんな行列も基本変形 (掃き出し法) により簡約行列に変形 (簡約化) でき、結果は一意的である. それにより、連立 1 次方程式を解くことができる.
 - (5) Vector 空間 V の部分集合 X について、その中に r 個の vectors からなる 1 次独立な組があり、しかも X のどんな $r+1$ 個の vectors も 1 次従属であるとき、 r を X の 最大 1 次独立数 と呼ぶ.
 - (6) Vector 空間 V の最大 1 次独立数を与へる集合 B を V の基または 基底 といふ. r を V の 次元 と呼んで $\dim(V)$ または $\dim V$ と記す.
 - (7) Vector 空間 V からそれ自身への線形写像を線形変換といふ.
- ★ 以下 V は vector 空間, 基 $\{u_1, \dots, u_n\}$ は V の基, T, T_1, T_2 等は $V \rightarrow V$ は線形変換であるとする.
 ★ A, B は n 次正交代行列とする.

- (8) $T(u_1, \dots, T(u_n)) = (u_1, \dots, u_n)$ A とする行列 A をこの基に関する T の 表現行列 と呼ぶ.
- (9) 線形写像 $T: U \rightarrow V$ について
 $\text{Ker}(T) = \{u \in U \mid T(u) = 0_V\}$ を T の核, $\text{null}(T) = \dim(\text{Ker}(T))$ を T の 退化次数,
 $\text{Im}(T) = \{T(u) \mid u \in U\}$ を T の像, $\text{rank}(T) = \dim(\text{Im}(T))$ を T の階数といふ.
- (10) $\varphi_A(t) = |tI - A|$ を A の固有多項式と称する.
- (11) $Au = \lambda u$ (あるいは $T(u) = \lambda u$) とする scalar λ と $u \neq 0$ が存在するとき、それぞれを A の (あるいは T の) 固有値, 固有値 λ に対する 固有 vector と称する.
- (12) $W(\lambda, A) = \{u \mid Au = \lambda u\}$ を λ に対する A の固有空間と称する.
- (13) $W(\lambda, T) = \{u \mid T(u) = \lambda u\}$ を λ に対する T の固有空間と称する.
- (14) λ が A の固有値であるためには $\varphi_A(\lambda) = 0$ であることが必要十分.
- (15) Cayley-Hamilton の定理: $\varphi_A(A) = O, \varphi_T(T) = O$.
- (16) Vector 空間 V 線形変換 T の V の適当な基に関する表現行列 A に対し $\varphi_T(t) = \varphi_A(t)$ と定め、これを T の固有多項式と呼ぶ. $\varphi_T(t)$ は V の基の並び方に依存しない.
- (17) ある正則行列 P が存在して $B = P^{-1}AP$ とするとき、 A と B は 相似 であるといはれる.
- (18) 正則行列 P が存在して $P^{-1}AP$ が対角行列になるとき、 A は P により 対角化 されるといふ. またこのとき、 A は 対角化可能 であるといはれる. T の表現行列 A が対角化可能であるとき、 T は 対角化可能 であるといはれる.
- (19) A が対角化可能 $\iff \sum \dim W(\lambda, A) = n$. 但し、和は A の固有値 λ のすべてに渡る.
- (20) T が対角化可能 $\iff \sum \dim W(\lambda, T) = \dim V$. 但し、和は T の固有値 λ のすべてに渡る.
- (21) 任意の $u, v \in V$ に対し $(u, v) \in \mathbb{R}$ が定められて、第 1 変数についても第 2 変数についても線形性を持ち、さらに任意の u, v について $(u, v) = (v, u)$ が成り立ち、 $(u, u) = 0 \iff u = 0$ を満たすとき、 V には内積 (,) が定められておるといひ、その様な V を 内積空間 と称する.
- (22) 内積空間 V においては $\|u\| = \sqrt{(u, u)}$ なる記法を用いる. これは u の norm と呼ばれる.
- (23) 内積空間において $(u, v) = 0$ とする vectors u, v は直交するといはれ $u \perp v$ と記される.
- (24) 実正交代行列 P は $P^T = P = I$ を満たすとき 直交代行列 と呼ばれる. これは $P^T P = I$ と同値である.
- (25) 任意の $u, v \in V$ に対して $(T(u), T(v)) = (u, v)$ となるとき T は 直交代変換 であるといはれる.
- (26) T が直交代変換であることと T の表現行列が直交代行列であることは同値.
- (27) 実正交代行列 P が直交代行列であるためには、 A の列 vectors の長さが全て 1 でかつ互ひに直交することが必要十分である.
- (28) $A = A$ のとき A は 対称行列 と称される.
- (29) どんな対称行列も直交代行列により対角化される.
- (30) $A = [a_{ij}]_{2 \times 2}$ が実対称行列のとき $a_{11}x^2 + 2a_{12}xy + a_{22}y^2 + b_1x + b_2y + c = 0$ で表はされる 2 次曲線は平行移動と直交代変換を合せた $x = Px' + d$ により標準形 $Ax'^2 + By'^2 = 1$ で表される曲線に合同変形される.
- (31) $A = [a_{ij}]_{3 \times 3}$ が実対称行列のとき $a_{11}x^2 + a_{22}y^2 + a_{33}z^2 + 2a_{12}xy + 2a_{13}xz + 2a_{23}yz + c = 0$ で表はされる 2 次曲面はある直交代行列 P で $x = Px'$ と変換することにより標準形 $Ax'^2 + By'^2 + Cz'^2 = 1$ で表される曲面に合同変形される.
- (32) $f_1, \dots, f_r \in \mathbb{R}[x]$ と $d = d(t) = \text{gcd}(f_1, \dots, f_r)$ に対し $d = g_1f_1 + \dots + g_rf_r$ なる $g_1, \dots, g_r \in \mathbb{R}[x]$ が存在する. この様な g_i は $r > 2$ であつても互除法を繰り返せば求められる.
- (33) $\mathbb{R}[x]$ の部分集合 J について $J + J \subset J$ と $J\mathbb{R}[x]$ が成り立つとき、 J は $\mathbb{R}[x]$ の ideal であるといはれる.
- (34) V の部分空間 W_1, \dots, W_r について、任意の $v \in V$ に対し $w_1 \in W_1, \dots, w_r \in W_r$ が一意的に存在して $v = w_1 + \dots + w_r$ と書けるとき、 V が W_1, \dots, W_r の直和であるといひ、 $V = W_1 \oplus \dots \oplus W_r$ と記す.
- (35) A (あるいは T) に対し $f(A) = O$ (あるいは $f(T) = O$) が成り立つ多項式 $f(t) \in \mathbb{R}[t]$ のうち最小次数のものを A の (あるいは T の) 最小多項式 と呼び $\mu_A(t)$ (あるいは $\mu_T(t)$) と記す.
- (36) A が T の表現行列であれば $\mu_T(t) = \mu_A(t)$. $\mu_A(t) \mid \varphi_A(t)$. $\mu_T(t) \mid \varphi_T(t)$.
- (37) $\mu_A(\lambda) = 0 \iff \varphi_A(\lambda) = 0$. $\mu_T(\lambda) = 0 \iff \varphi_T(\lambda) = 0$.
- (38) 線形変換 T が対角化可能 $\iff \mu_T(t)$ は重根を持たない. (もちろん、行列に関しても対応する主張が成立する.)
- (39) $T_1 T_2 = T_2 T_1$ のとき、 T_1 の各固有空間は T_2 によりそれ自身に写され、 T_1 と T_2 に共通の固有 vector が存在する. (もちろん、行列に関しても対応する主張が成立する.)
- (40) T_1 と T_2 がともに対角化可能で T_1 の各固有空間が T_2 によりそれ自身に写されるならば、 $T_1 T_2 = T_2 T_1$ となる.
- (41) $V = W_1 \oplus \dots \oplus W_r$ で各 i について、 T_i が W_i の線形変換であるとき、各 $v = w_1 + \dots + w_r$ (各 $w_i \in W_i$) について $T(v) = T_1(w_1) + \dots + T_r(w_r)$ と定められる線形変換 T を T_1, \dots, T_r の直和と称して $T = T_1 \oplus \dots \oplus T_r$ と記す.
- (42) $A^2 = A$ であるとき A を 冪等行列 または 射影行列 と呼ぶ.
- (43) $m \in \mathbb{N}$ が存在して $A^m = O$ となるとき A は 冪零行列 と呼ばれる.